IS <インフィニット・ストラトス> (仮)

漆黒の馬鹿

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ　＞インフィニット・ストラトス＜　（仮）

【Ｎコード】
Ｎ８５８５Ｍ

【作者名】
漆黒の馬鹿

【あらすじ】
天使を名乗る少女に『あなたは死にました』とかいわれて、ＩＳの世界にきた少年がいる。
彼はそこでなにを見て、なにを知るのか。

……あらすじ適当です。
再投稿です。

序章：昔話。（前書き）

書きなおしたけどカオス。

序章：昔話。

―今日は一つの昔話をしようか。

―うん！おじーちゃん。きかせてきかせて！

―そうだなぁ。あれはいまから１０年ぐらい前のことだった。
きっかけは些細なこと。でも、それがぼくら男性が『差別』される
男尊女卑社会の始まりだったんだ。

――――――――。

今から１０年ほども前の話だ。
１人の天才がある機械を作って発表した。
皆もよく知っている彼（か）のＩＳ。その表舞台への初出場だった。
制作者の彼女は言った。

このＩＳには世界中の軍事力なんて足元にも及ばない。

そんなもの軽く凌駕して見せる。

彼女の言に世界は見向きもしなかった。
いや、そうではない、か。
向いてしまったら、聞いてしまったら。
信じてしまったら何か決定的なものを失う。
世界はそう心のどこかで思ったのだろう。

そして事が起こったのは丁度１ヶ月後。
日本を攻撃することができる範囲にある国、
その所有していたすべてのミサイル。
２３４１発がハッキング、制御不能に陥る。

そしてすべての砲門は日本へ向き……

発射された。

世界は混乱、絶望そして恐慌に陥った。
迎撃する術（すべ）、ひいては戦後の軍備縮小によって
軍事力を持たない。いや持てない日本は、
眼前まで迫りくる最後の時に対して何もできなかった。
だが、着弾予想地点。各国のミサイル発射のための指令室。
そこよりもたらされた場所、神奈川県沖。
突如一条の、１人の光が飛び込んできた。
１人というと語弊があるのか？

１台の、白き鎧を纏った騎士が現れた。
顔を隠すその英雄。
神奈川県沖浪浦。
富士を背に浪の上に立つその威風堂々とした姿は、
まるで荒れ狂う浪を鎮めるかのような。

神々しさを持っていた。

騎士は釼を取り出した。
構えた。
迫る絶望の弾幕を。

斬る。

斬った。
斬って。
斬って。
斬って。
斬り捨てた。

記録によれば、全２３４１発中の１２２１発が
その一振りで海に沈んだ。
振り抜いた釼を投げ捨て、
当時不可能と言われた超荷電粒子砲を召喚し
残りの弾幕を消していく。
また、当時は大変な状況だったために気付くものは
それほど多くはなかったが、
あまりに騎士から離れたものを撃ち落としていく

数発のプラズマ砲が確認されている。

ミサイル発射で震えた世界は再び震撼する。
しかし各国の軍はその驚異にして脅威にして
圧倒的な強威に対し間抜けではなかった。
すぐさま国際条約を無視、神奈川に向けて偵察機を放った。

また、このあたりで突然ジャミングが入り、
映像や音声の記録はほとんど残っていないが
現場にたどりついた最新鋭の偵察機のパイロットが見たものは、
爆炎の中から現れる、２台の騎士だった。

白い騎士、そして現れた黒い騎士
２機は共に、舞を踊るかのように廻る。廻るかのように舞う。

回る。
廻る。

切る。
斬る。

斬り合う。

舞踏を演ずるかのそれ。
それは同時にすべての干渉を、観照を、観賞を否定する。
だが、だが、だがそれを無粋にも邪魔をせんとするもの現れたり。

左右から2機にせまる舞にそぐわぬ無骨な一戦闘機（乱入者）。

白き騎士が左へと1回転。
1機目は為す術もなく、落ちる。

黒き騎士が右へと1回転。
2機目も為す術なしに、墜ちる。

その間(かん)も2機はステップを踏む。
場所を入れ替え、入れ替え、入れ替え廻り続ける。

世界はさらに戦力をつぎ込む。

白き騎士の、釼が閃く。
近ずく兵器は斬り裂かれ、墜ちる。墜ちる。

黒き騎士の双釼が、残像残しぶれる。
攻撃試みる兵器は切り刻まれ、墜ちる。墜ちる。

最も美しく。…最美。
最も強く。…最強。
最も恐ろしく。…最恐。
最も狂っている。…最狂。

最悪の舞踏は続く。続く。

……。

事態の収束は日没を同時。
時に争い、時に共に踊った。
２機の騎士は、消えた。
出現と同じくして、唐突に。
白、黒、はたしてどちらが先か？
同時に、同時に姿を消した。

…完全なステルス。
世界中はたった２機に敗北した。

この戦いで失った世界の戦力は、
ミサイル２３４１発。
戦闘機４６３機。
巡洋艦１３隻。
空母７隻。
監視衛星５基。

たった。たった２機によりこれだけのものが失われた。

すべてのものは、正面から挑み、軽く受け流された。
そう、２機はお互い以外の何ものも見ていなかったのだ。
それほどの余裕があって、この結果だった。

そして再び始まる、始まる。
正史から僅かに逸れた、
１つの外史の物語が始まる。

序章：昔話。（後書き）

カオス。
そしてこんな駄文を読んでくださる皆様に
多大なる、かつ無上の感謝を。
できれば批評・御指摘をください。

第零壹話　入学、遅刻、連続殴打。（前書き）

カオス。
カオス。
書き直したらさらにカオス。

第零壹話　入学、遅刻、連続殴打。

自己紹介なんて名前を適当に言っておけばいいんだろ？
そう言って憚らない少年。
彼は今、その短い人生１６年において最大の窮地に追い込まれていた。

ここはＩＳ学園。
ＩＳ。正式名称『インフィニット・ストラトス』。
元々は宇宙空間での活動を前提に作られたものだったが、
ある致命的な欠陥があったため、
その方向での研究は遅々として進んでいない軍用兵器。
ＩＳ学園はその軍用兵器ＩＳの選ばれた操縦者を育成・
研究する施設である。
研究、といってもこれはＩＳの研究というよりも
操縦者になる条件の研究という面が大きく
研究対象はもっぱら人体である。
それから選ばれた操縦者を育成、なんて言うと聞こえはいいが
要するに日本が開発した厄介な兵器なんだから
そっちで何とかしてくれ、と世界から押し付けられたわけであり…。
だけれども世界は独自にＩＳの開発をしているというなんだか…な
感じである。

そんなことならＩＳを起動できる彼がここにいても
なんの問題もないんじゃないか？
いやいやいや、ここで忘れてはならないのがＩＳ唯一にして
最大の欠点である。それは『ＩＳは女性にしか扱えない』であった。

なんの因果か高校受験の会場を間違え、偶然ＩＳ学園の試験場に迷い込んだ
少年はまたまた何の因果か偶然警備員にも見つからず、
偶然忙しくて目の前の人の確認もしなかった試験官の誘導の元、
偶然触れた試験用ＩＳを起動させてしまったのである。

つまりつまりつまり、それはここには男子は一人しかいないというわけであり、
少年、織斑一夏は世界で一人の男性ＩＳ操縦者であるということでして。
当然まわりは全員女子。さらにさらにさらに、みな一様に好奇心旺盛な
目で彼を見る。
そしてそしてそして、彼が何を言うのか、どんな行動をするのか、
その言動行動一挙手一投足に注目、なわけで。
ここで冒頭に戻るが『自己紹介は簡潔に』がモットーの（↑違う）
一夏君は人生最大の窮地に陥っているわけである。

閑話休題。

そんな一夏君にも救いの手が訪れる。
教室の扉がガラッと開いて、
現れたるは腰まで届く黒髪の、
蒼き瞳持つ、身に纏うは男子の制服。
一見少女かと見紛うその姿。

こちらで説明すると彼は一夏の幼馴染の少年、
まぁ、数年前に家出同然に行方をくらました

織斑家の元居候でもある。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「すいません遅れました！」

その少し掠れたかのような、それでいてひどく澄んだ声、
ついに俺にも救いの手が現れた。

「…って、なんでここにいるんだよ爐？！」
ここには、ってゆうか全世界に男性操縦者は俺１人だけだって、
あの関羽…もとい千冬姉だって言ってたのに。

「いやーそれがな、赫々云々四角いムーブＩＳ新登場的に。
これでわかっただろ？」
いや、分からないから。
「あれ、おかしいなあ。
千冬さんはこれで分かってくれたのに」
姉さんとは会ってたのかよ！
俺だって千冬姉とはこの前の春休みみたいな長期休暇の時期以外
会えないってのに…。
あの人は月に１・２回しか帰宅しないからなぁ。
「だってさ、千冬さんはここで働いてるんだから
挨拶すんのは当り前だろう」
なっ、職業不詳だと思っていたらそういうことか。
なぜか千冬姉は俺にＩＳ関係に触れてほしくないみたいだし…。

「あの～。そろそろ次に進めたいのですが…」
あ、先生。爐？が現れてすっかり忘れてたけど
「山田先生の言うとおりだな」
ギギギッ
背後からの声にそんな擬音がつきそうな動きで俺は振り向く。
そこにいたのは、
「げえっ、関羽！？」
「だれが三国志の英雄だ？誰が」
ではなく、この声この顔この口調はまさか
さっきまで噂に上がっていた
俺の実姉。織斑千冬その人では？

ゴシゴシ。ゴシゴシ。
目をこする。

何も変わらない。

「何を呆けている。
まったく、お前は自己紹介もろくにできんのか？」
さも呆れているかのように我が姉は大げさに首を振って見せる。
「ようではない。本当に呆れている。」
スパーン
神速の出席簿チョップ。
確か前回は俺の卒業証書だった気がする。
て言うか千冬姉さん。知ってる？
出席簿って角使うと結構痛いんだぜ。

「あ、織斑先生。
会議は終わったのですか？」

再び空気になっていた副担任の山田先生がそう聞く。
「ああ、山田先生。大丈夫です。
…それで、どこまで？」
な、なんだこの優しい言葉は！？
あの千冬姉と同一人物とはとても思えないぞ。
「今ぼぉっとしていた織斑君と
遅れてきた爐？君以外の自己紹介が終わったとこです」
そうだったのか。
ほかは終わっていたなんて気付かなかった。
「わかった。
織斑、おまえは席につけ」
「わかったよ千冬ね―」
スパーン！！
本日2度目。
千冬姉。人の脳細胞ってたたくとかなりの数が死ぬんだよ。
「織斑先生と呼べ」
はい。すいません。
「さて、私が担任の織斑千冬だ。
私の言うことはよく聴き、よく理解しろ。
逆らってもいいが、私の言うことは聞け。以上だ」
相変わらずの暴力発言。これは女子たち引くんじゃ…
「千冬様！本物の千冬様だわ！」
「お姉さまにあこがれて北九州から来ました！」
「私、お姉さまのためなら死ねます！」
きゃいきゃい騒ぎ出しました。ハイ。
まったく女心というものは分からない。
というか南北海道でもいいから。
それと死んじゃダメだろ、オイ。
「毎年毎年バカどもが…」
千冬姉さすがにその発言はどうかと思うぞ。

で、爐？はどうするんだ？

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

突然だが俺、爐？　燿は転生者だ。
は？何言ってるの、コイツ？
とか、病院紹介してあげるよ？
とか言うのは無しな方向で。

あの日、一人寂しく学校の
教室に居残って勉強していた俺。

ふと腕時計を見る。
「やっば、もう１０時じゃん。
早く帰んないと病院の先生にまた怒られるな」
戸締りをして夜の街へ。
１０時とは言え街はまだ喧騒に包まれている。
しかし俺にはそれが闇への誘いに聞こえた。
俺は昔から原因不明の貧血のような症状を

たびたび起こした。
そんな時いつも両親はそばにいてくれたんだが…。
今はいない。記憶があいまいだが死んでしまったらしい。

俺のこの症状は夜、それも明かりの明滅が多い場所で起こる。
前回は近くの駅で倒れた。
幸いすぐに病院へ運ばれたが…。
その帰り道。
送っていくという先生の好意を辞退して。
そんな日常。

けれどもこの日、
運良く、運悪く、平凡な日常の中、
されど非凡の非日常な中
俺は出会ってしまう。

自身を天使と名乗り、
だがしかし上司(かみ)の命で命を奪いに来た、
死神でもあると名乗る少女と。

…死んで死にます死にました死なされました死なれましたけど。（
↑錯乱中の似非５段活用）

――――――――

何も無い。

されど全てが在る。

何も見えない。

されど視界は３６０。クリアで。

何も聞こえない。

されど全てが耳に入る。

周りはそんな場所で。

俺は出会う。

ここには何も無いけれども。

ここでは何も見えないけれど。

ここでは何も聞こえないけれども。

彼女に。

出遭った。

―あなたは死にました。

そうなのか。

―というより私が殺しました。

それは困るな。

―悪魔。…いえ正確には堕天使。

―そんな存在が。

―あなたを含め、多くの人類の魂・魄・タマシイ。

―そう呼ばれるものに細工を施しました。

悪魔？細工？

―輪廻転生。生きとし生ける生在りし物は
―すべてその輪に乗ります。

そうらしいな。『学園』で前に調べた。

―その輪から『ヒト』を零れ落ちさせること。
―それで何をするのか？それは分かりませんが。
―やつらは何かをしようとしています。

それで俺を殺すことと何の関係が？

―あなたが死ぬのを待っていたらタイミングを逃す可能性がありました。
―あえて殺すことで魂を捕まえ、強制的に次世界へ送ること。
―それが私、ネーム『死神』に課された指令です。

次世界？転生？
なんかチートな力でもくれんのか？

―　……。
―その通りです。
―前述の通りやつらが何をたくらんでるのかまでは、
―我々や上司のあの方でも掴めませんでしたが。
―細工をした『ヒト』がアクションを起こせば
―動く可能性があります。

つまり体のいい囮ってわけか…。

―申し訳ありません。
―本来あのようなものへの対処はこちらで行うべきであるのに…。

いいぜ。その話乗った。
能力はどんなものをくれるんだ？

―――――――

こんな話の結果色々あって。
ＩＳの世界なのにリリなのデバイスっぽい物とかとかもらい、
この世界で下準備をしてきて、
入学初日。今日にいたる。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「すいません遅れました！」
教室のドアくぐる。
ほんの少しだけ胸を張る。
教卓まで歩き出す。

一夏がいたので漫才な掛け合い。

千冬さんが一夏へ攻撃。

千冬さん自己紹介。

黄色い歓声。

↓「爐？もとっとと自己紹介をしろ」とのありがたーいお言葉。

さて、自己紹介だ。

……その前に。

〜〜〜〜

「このバカが、…貴様も我が愚弟とともに何をやっている」
スパァン！
「あたっ！」
突然、なぐられた。
「突然なんですか。織斑先生」
分かってはいるがあえてはぐらかす。
「貴様は人に無理やり学園に入れろと言って置きながら
自分自身は堂々と遅刻だと？
殴る理由等充分過ぎるほどあるだろう」
凄まれた。
いや、確かに頼んだけどさぁ。

もとはと言えば束さんが突然謎のうさみみを持って家にやってきて、
うさみみを俺に向けるなり、ＩＳ適正Ａランクくらいあるから学園
に行ってね。
フォローはしないけど。
とかのたまい無理やりＩＳコアを押しつけ
ミサイル型ロケットで帰って行ったからじゃん。
途中なんか撃墜される音が響いたけどさ。

「と、いうわけで俺は悪くない」
開き直ってみる。
「何がというわけなのかは知らんがな。
５年前にやつが引っ越していったと思ったら
同時期に置手紙残して消えた居候。
しかもそれから音沙汰なしだった奴だ。
殴られて当然じゃないか？
なあ、一夏。お前もそう思うだろう」

千冬さん、一夏に振りやがった。
あいつが逆らうわけがないのに……。
「あ、ああ。そうだ…ですね。」
一夏〜。にっこりと微笑んでおく。
「（後で覚えてろよ。）」
女子の1部がきゃーきゃー言ってる気がするが気にしない。
というか気にしたら負けだと思う。いろんな意味で。

〜〜〜〜

なんて言うやり取りがあった気もするが、
気がするだけだろうな。

「あ、あの〜。
そろそろ本当にその娘？を
紹介してほしいんですけど〜？」
いや、そろそろしようかと……。
「ああ、そうだな」
スパーン
「こいつは世界に2人しかいない事例」
スパーン
「その2人目だ。ああ、1人目はそこの織斑な」
スパーン
「へ〜。じゃあ男の娘なんですね」
スパーン
「あ、ああ。そう、だな…？（なんかへんな響きだった気がするな）
」
スパーン
「そうですか。…ふむふむ、いいこと聞いた」

スパーン
……救いの手は俺には訪れない。
スパーン
「あの、千冬さん？」
スパーン
「あの…」
スパーン
「あｎ―
スパーン
「―
スパーン
「痛い」
スパーン
「い―
スパスパスパスパーン
「ふう」
やっと止まった……。

「ここでは織斑先生だ」
「は？」
「わかったな？」
無言の圧力とはこういう物を言うのだろう。
「……はい。織斑先生」
屈服した。

無言。沈黙。無音の空間。
「あのー、そろそろ自己紹介を…」
ナイスだ山田先生。
「ああ、そうですね。
ほら爐？。自己紹介をしないか。早く」

誰のせいでできなかったと？
というかさっきも言いましたねその科白。
「えー、改めて自己紹介です。
爐？燿、『いろりばた』でも『かがや』でも、
好きな呼び方をしてくれて結構です。
特技はＩＳの整備です。
これからどうかよろしくお願いします。」
再び黄色い（？）悲鳴が上がった。

1時間目の授業が終わった。
「なあ、この状況どうする？」
一夏と俺、どちらともなくそう切り出す。
この状況とは学校中の女子たちがこの教室に集まっていることだ。
「いや、ここは俺たちから話しかけるべきじゃ」
「一夏、この周りから話しかけてオーラが
伝わってくるこれ、1人に話しかけたらあとは…分かるよな？」
そう、話すことはなんでもないんだ。
教室に漂う微妙な緊張感。緊張感。
これを破ったら何かが起きそうで怖い。とても怖い。
だから俺たちからは動けない。

そんな空気を良くも悪くも打ち砕いた猛者がいた。
言わずもがな、一夏の幼馴染その1の箒であった。

第零壹話　入学、遅刻、連続殴打。（後書き）

こんな駄文を読んでくださる皆様に
無上の感謝を捧ぐ。

燿「批評・指摘などいただけると。
この作者…もといただの馬鹿は、
感想でなくとも喜びます。

第零弐話　廊下、再会、二重殴打。（前書き）

カオス。
途中で切れていた理由が判明。
常用外。どころか環境依存文字ですらない
特殊な漢字を使っていたことが原因だった。
←使えるか確認
？？

第零弐話　廊下、再会、二重殴打。

「い、一夏！」
今回の物語はそんな條乃之箒の呼びかけから始まる。
教室に漂っていた、少年一夏には到底理解できない
緊張感。
それを完膚なきまでに打ち砕いた箒に
幼馴染の一夏は極々自然に返事を返す。
「おう。箒か、なんだ？」
軽い。軽すぎる。もう一人の少年燿はそう思った。
思っただけで無粋なつっこみはしない。
ギンッ
そんな一夏を箒は睨みつける。
まぁおそらく照れ隠しなのだろうが
鈍くて鈍く、鈍すぎる一夏には伝わらない。
むしろ嫌われてると思っている。
「ちょっといいか？」
「ああ、いいよ」
「じゃあ俺は向こうに行ってるな」
感動（？）の再会を邪魔しないように、
と燿は席を外そうとするが箒は呼び止める。
「待て、お前も来てくれ」
「あ、ああ。いいけど」
（一夏は睨まれたりしてるし

最初忘れられてたけど思い出して
もらえただけまだマシじゃね？
絶対俺箒に忘れられてるって。
一緒に来てくれって言われたのも
自分１人じゃうまく一夏と会話できないからだろうし）

答えつつも内心軽く絶望の淵から落ちかけている
燿であった。

「（気を持ち直して）
よし、ここじゃ周りがあれだし廊下へ行くか」
「そうだな。行くか、箒」
「一夏に言われなくても分かっている！」

少年少女移動中…（ｓｉｄｅ　ｏｕｔ）

「そういえば」
「なんだ？」
「去年、剣道の全国大会優勝おめでとう」
ギンッ
おぉう。
睨んでる睨んでる。
「なんでそんなこと知ってるんだ」
「いや、新聞に載ってたし」
「なんで新聞なんか見てるんだ！」
さすがにそれは無いよ箒さん。
新聞は普通読んでるだろうし。
それよりも、俺はこのまま無視ですか？

「それと…」
「な、なんだ」
「久しぶり。箒ってすぐにわかったよ」
「よ、よく分かったな」
はぁ、今は壁に徹しよう。

……

……

「そろそろいいか？」
「「……」」
ギンッ
睨まれました。
心なしか2人ともに。

「いや、このままだと俺が付いてきた意味がなくなる気がしてね」
「それは悪かった…」
うん。睨んできた気がするけどやはり一夏はいいやつだ。
「一夏、誰だこの女のような男のような奴は」
箒さん。一夏が最初分からなかったのは知っていますが、
やはり俺のことも覚えていなかったんだな。
というか、さっき自己紹介したよね！？
はっきりと一夏の家に居候していたって
会話あったよね？
「ほら、覚えてないか？あのころ周りの男子たちを
倒すときに作戦を立てたりしていた…」
「ん？……？？それとも爨か？」
「いやいや何だよ。その微妙な間違い方。
ってゆうか自己紹介はしたはずだが？」

なんで発音不可能な間違いとかするんだ。こいつ。
それよりかも息子に『かまど』ってつける親はいやだ。
「箒、参謀だよ。思い出せないか？」
「い、いやまて…。参謀…参謀……、かぐや？」
そっちか！？そっちなのか！？
そもそも3年の時の、男子たち相手の大立ち回り。
理由が原作と少し違い、箒のフォローに回った俺に対して、
当時から髪の長かった俺の名前をからかった馬鹿が居り、
なぜか箒が切れて3人で闘った、のがそうだったのに。
何故そっちで思い出すんだ。
一番怒ってたのはお前だっただろうが
「燿だ。燿。何故そっちのあだ名を思い出すんだ」
因みにこの呼び名、前の世界の『学園』でも
同じようなことがあり微妙に精神的傷痕（トラウマ）だったりもする。
「そ、そうだったな。うん、そうだった」

「さて、これで3人そろったわけだけど…」
「まて一夏それは違うぞ。まだ1人足りない」
「あと1人？それは誰だ？」
「そうだよ。あのときは3人だけだったろ」
ああ、あの時はな。
「凰だ」
「鈴音？なんで燿があいつのことを？」
「ふっ、俺にわからないことなどない」
嘘だけど。
「おい一夏。その鈴音ってやつはだれだ？ずいぶん親しそうだが」
「ああ、鈴音ってのは…」

キーンコーンカーンコーン。

「話はここまでだ。まずいぞ一夏。千冬さんに見つかったら…」
「ああ、早く戻らないと」
また殴られる…。
「誰に見つかったらまずいんだ？」
ギギギギッ

俺たちは振り返る。
絶望という名の一終焉（ｔｈｅ　ｅｎｄ）へと向かって。

スパパーン！
授業開始直後の廊下に、
虚しくただその軽快な音と悲鳴が響く。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8585m/

IS <インフィニット・ストラトス> (仮)

2010年12月25日14時11分発行